



# く せ ん 泉 薫

学校の目標  
社会の変化に自ら対応でき、豊かな心を持ち、表現力豊かな国際人を目指し、次のような子どもを育成する。  
・よく考え、進んで学習する子ども  
・いつも元気で、じょうぶな子ども  
・こころ豊かで、やさしい子ども

「なぜなぜ思考でいこう!」はなぜ?

校長 井上光広

三学期の合い言葉を「なぜなぜ思考でいこう!」と投げかけ二月に入ります。なぜ「なぜなぜ思考」なのかを大人向けに説明します。

◎「何のため」を常に自分に投げかけ、自問自答できる子ども(意味を見出す習慣)

◎「何事も自発的、積極的に取り組み、最後までやり通す子ども

◎自ら学び、自己の力を高めようとする子ども

◎「なぜ勉強をするのかな」など、ものごとを鵜呑みにしないで、一度は疑問を投げかけたり、別の視点から見直してみたりすることで、自問自答の習慣が身に付いていきます。いったん身に付いた学習習慣は「消えない学力」となり、生涯の宝となります。

「なぜ勉強をするのかな」など、ものごとを鵜呑みにしないで、一度は疑問を投げかけたり、別の視点から見直してみたりすることで、自問自答の習慣が身に付いていきます。いったん身に付いた学習習慣は「消えない学力」となり、生涯の宝となります。

手前みそになります。二〇一八年、当時副校長だった私のところに十年前の卒業生が来ました。その卒業生は教員を目指しており、採用試験の一次試験に合格したから面接試験の練習相手をしてほしいということでした。そこで私は、「面接練習の前に自分自身の教育観を高めておくことが大事だから、小学校の時に教えてある思考方法(自問自答するフレームワーク)で、目指す教師像を描いて、メールで送りなさい」と事前指導しました。卒業生は「なるほど、それはすぐできません」と十年前のことを即座に思い出し、実に優れた教師像を考え、私のところに送ってきました。それを見た瞬間、これならば間違いなく面接は通ると確信できる内容でした。十年たっても消えない学力をこの子には残してあげることができたと、私自身の確信にもなった出来事でした。この卒業生は無事に合格し、今では都内の小学校で音楽教師として活躍しています。

仕事上、私がよくしている学びを深化させる習慣に、「なぜ五乗の法則」というものもあります。一つのことに対して、「なぜ」を五回繰り返し、思考の階層を五階層掘り下げていく方法です。時には五乗が十乗、十五乗になっていくこともあります。そのように思考階層を意識していくと、割と本質的なところにたどり着ける方法です。よろしければお試しください。

「なぜなぜ思考」については、本屋のビジネス書(自己啓発)のコーナーに立ち寄っていただき、自分にあつた方法を見つかることもおすすすめします。

## ◎六年生・感謝の会について

例年三月の第一水曜日に六年生の感謝の会を行っていましたが、今年度から行わないことになりました。内容的に課題が大きいことや、この行事のために他学年の授業を削減してしまうからです。代替えとして、土曜授業時に保護者向けの六年生公開行事を行う予定です。

## 二月の生活目標

生活指導部

### 寒さに負けない体づくりをしよう

寒い日々が続きます。今年も例年以上の寒波に見舞われ、日本全国で記録的な大雪のニュースも聞かれます。そんな寒さの中でも、子どもたちは元気に外で遊んでいます。休み時間にも外に出てボール遊びや鬼ごっこ、矢口ギネスなどで体を動かしています。「子どもは風の子」寒い中でも元気に遊ぶことで、丈夫な体と心が育っていきます。

本校はノーチャイム制で、子どもたちに時間を意識して行動させています。休み時間の終了時には、自分たちで時計を見て、声を掛け合って校庭を後にする姿が、休み時間や放課後遊びの終了時には見られ、自発的な態度が育っています。

遊んだ後は、手洗いうがいを忘れずにするよう声をかけています。元気に遊んで丈夫な体をつくり、毎日を笑顔で過ごしてほしいと願っています。

### 『子どもたちの特別活動』

特別活動部

特別活動とは一人一人が自分の役割や責任を果たして、集団(学校)、生活をよりよいものにしていこうとする態度を育てる活動のことです。教科書はありません。また、この特別活動を通して、自己の生き方についての考えを深め、自己に生かす能力を養う活動でもあります。

先日、なかよし班活動では、六年生から五年生へリーダーのバトンが渡されました。この一年間、六年生は、リーダーとして班をまとめ楽しい活動を企画し、運営してきました。時に、思うようにならない事もありましたが経験した全てが力となったはずです。

これからも様々な集団活動を通して、友達の間になつて考え、友達の表現や主張の違いを受け入れ、互いに認め合い、互いに高め合う集団を育成していきたくて考えています。人と人との距離を求められる昨今ではありますが、特別活動では身体的な距離は取りながらも、心と心の距離を縮め豊かな人間関係を育めるようにしていきます。

